

2011.4.7

香港 花木

4月上旬、広東省東莞市にある日系自動車部品メーカーを訪れた。

(1) 東日本大震災の影響

一番大きな影響が出ているのは、日本からの部品供給が滞っていることにより、広州ホンダや東風日産等、完成車メーカーの生産に支障が出ていることである。日本から中国広州への自動車部品は一般に海上コンテナで20日から1カ月かけて輸送されているところ、3月11日の地震発生から既に約4週間が経過したことから、これまで東北地方の工場で製造されていた部品等、完成車の生産に不可欠な電子制御部品等の入手がそろそろ現実に困難になり始めているという。この影響で、清明節休暇が明けた4月6日から、広州本田、東風日産はこれまでの二直生産体制から一直体制に操業体制を変更したと伝えられている。更に、今後についても、工場によっては福島第一発電所の避難区域内に立地しているため金型や設備を持ち出すことすらできず、生産再開のめどが全く立たない部品メーカーもあるようで、今後4月下旬から5月には完成車メーカーの生産ラインがストップすることも想定される状況になっているという。こうした状況は日系完成車メーカーにおいて最も顕著だが、欧米メーカーも同様に一部の車種で影響を受けている。一方、中国地場メーカーについてはもともと日本からの輸入部品を使っていないところがほとんどであり、あまり影響はなさそうである。

中国における日系自動車メーカーは部品の調達率が高くなっているとは言っても、完成車は3万点にも及ぶとされる部品が全てそろわなければ生産できないため、一部の代替のきかない基幹部品の供給問題は、完成車メーカーの操業率低下を通じて他の様々な一般の部品メーカーにも発注キャンセル等大きな影響を与えつつある。また、完成車メーカーも、今回の「部品調達ショック」を契機に、今後部品調達政策を更に見直し、部品の国内調達率を上げようと動くものと予想される。ただし、今回訪問した日系部品メーカーのように、中国への進出を契機に国内完成車メーカーだけでなく欧米メーカーや中国メーカーにも取引先を広げている企業にとっては、完成車メーカーにおける部品調達現地化の加速は逆に新たな取引先を開拓するためのビジネスチャンスでもある。ただしそのチャンスを現実のものにするためには、部品メーカーレベルでも材料や素材等の中国国内調達率を引き上げて更なるコストダウンを図る必要がある。同時に、部品メーカーレベルでも浦安における液状化の影響で鉄鋼団地からの鋼板調達が困難になったり、高度な樹脂材料が取りあいに思った量が調達できない等の影響も出ており、素材の調達先を中国国内に変更するよう検討を行っているということだった。こうした経過をたどって、今回の震災の影響は、日本からの部品輸出だけでなく、素材輸出にも影響を与えることになりそうである。

一方、部品メーカーの中でも日系完成車メーカー依存度の高い企業は、今回の完成車メ

一カーにおける減産の影響を受けて 5 月以降の注文がキャンセルされたところもあるようだ。こうした企業では従業員の雇用に手を付けざるを得ないのではないかと考え、労働契約法に基づく 30 日前の解雇予告等、今から準備を進めているところもあるという。そこまでいかない場合でも、残業を減らしたり休暇をずらす（夏休みを前倒しで五月の労働節連休に持ってくる等）の対策を始めているところも多い。この辺りの労働問題は、このまま事態が推移すれば、5 月頃にも顕在化する可能性があるようだ。



↑ 東ガン市政府及び JETRO 広州・広州日本総領事館の共催で行われた日系企業地震被害対策会議。（4 月 7 日）多くの日系企業が参加し、東ガン市として日系企業に対して通関や供电等の便宜を最大限図る旨説明が行われた。

（2）日系企業労働者の意識

実は、今回上記の企業に訪問したねらいは、同社総経理のご厚意で、同社従業員との座談会を開催させていただけることになったため、それに参加すべく赴いたものである。今回は総計 7 名、年齢は 25 才から 37 才、職位は副係長から工場長まで、男性 2 名女性 5 名の多様なレベルのワーカーと 1 時間半にわたり会社の会議室で、またその後食堂で昼食をとりながら様々な話をすることができた。（出身地は湖南省 2 名、黒竜江省、湖北省、陝西省、貴州省、広西チワン族自治区各 1 名。）

①転職経験

話してみて「やはり」と感じたのは、転職が多いことであった。多くの人が3回目の転職でこの会社に来ており、他の企業（日系だけでなく内資系、台湾・香港系等）の職場を経験している。この会社に来てからの年数は平均で約3年ということだった。

②重視していること

今回の座談会でよく聞かれた単語は「人性化」という言葉だった。「人性化」とは「人を大切にしている」というような意味である。具体的には職場はもとより食堂、寮も含めたハードとしての環境のよさ、更にソフトとしての居心地のよさが挙げられた。具体的には従業員同士ですれ違うときにも挨拶を励行していることや、夏の暑い時期には午後必ずおやつとして果物が出されること、従業員の誕生日にはケーキが贈られることといった生活まわりの事柄のほか、仕事面でも毎朝の朝礼で従業員が順繰りに自分の考えを発表すること、更に企業の目標を明確にした上でそれをそれぞれの職場単位にブレークダウンして自らの目標を明確にし、それをどの程度達成したかに応じて昇進・昇給が決まるという分かりやすさが指摘された。ある管理職はこうした管理方式を「日本式のよさ（チームワーク）と中国式のよさ（成果目標の明確さ）をうまく組み合わせている」と表現していた。

新入工員の感想（同社社内報より）

学校を出て町に働きに出ってから2年、今回初めて友達の紹介で東ガンにやってきました。出勤した最初の日、工場の門に立つカッコいい警備のお兄さんが、出勤してくる工員さん一人一人におはようといさつしているのを見て、急に心が暖かくなった。（*^_^*）へへ・・・。今日はいいい一日になりそうな予感。朝礼のときも皆お互いにあいさつしていて、その暖かい感じと穏やかな雰囲気を眺めていると、工場の人々と昔からの知り合いみたいな気分になってきたよ。

休憩時間になってみんなと一緒に食堂にきてびっくり。なんと清潔で整理整頓されているのか！！更に配膳口に来て口の形が○になってしまったのはおかずの多さにびっくりしたから。あれもおいしいそうだしこれもおいしいそう。配膳のおじさんに頼んで全部盛り付けてもらって、お腹がパンパンになっちゃった。

工場では知らない人ばかりで何を話していいやらと思っていたら、年配のお姉さんがやってきてやれ篤くないか寒くないかから始まって、品質についていろいろ教えてもらった。前の職場の無味乾燥な雰囲気とは大違いでまたまたびっくり。

気がつけばもう働き始めて一カ月になり、会社のこともだんだんわかってきた。工場の偉い人も分け隔てなく接してくれるし、まさに一つの家族みたいな雰囲気。社長は工員一人一人を家族のように面倒みってくれるし、ひとりぼっちで町に来ている私たちを温かく包んでくれる。だから私は大きな声で叫びたい。「この会社の全てが大好き！」と。

③研修への強いニーズ

最近の「80後」、「90後」と呼ばれる新世代農民工は研修による自己研さん・自己実現に

対して強いニーズがあるという調査結果が出ている。(例:2011 年度 JETRO 香港委託調査・深セン農民工アンケート) ある管理職がこの背景と新世代農民工の考え方に対して以下のとおり彼なりの解説をしてくれた。この解説は非常に得心したので以下に紹介したい。

「1990 年代初めに自分が田舎から出てきたときは毎月 150 時間以上の残業をして、1600 元の給与を得ていた。当時は生活費が安く、自分の生活に必要な費用を差し引いても毎月 1100 元は手元に残った。当時、大学に進学した自分の同級生や公務員になった者でも手取りはせいぜい 800 円で、町に出て工場で働いている自分は実家にたくさんのお金を送り、それにより父母の生活もぐっとよくなる等、ある意味憧れられる存在だった。ところが今や生活コストは上昇する一方で給料はあまり上がっていない。この辺りでも台湾系・香港系企業等では手取り 2000 元に満たない職場はたくさんある。2000 元では自分自身の生活すらおぼつかず、実家への仕送りも到底満足にできない。同級生の中でも町に出稼ぎに行く人間は「負け組」になりつつあり誇りもない。こうした状況で新世代農民工が我慢強く働かなくなったといってどうして責められようか。新世代農民工の考え方が変化したのではなく、働く環境があまりに変化してしまい新世代農民工の将来展望がなくなっているのが不満の根源にある。」

こうした中で、多くの新世代農民工は、工場での労働を「将来の創業へのステップ」として位置づけ、単に賃金を得るだけでなく、仕事を通じて自らの道を自ら切り開くための様々な知識を学びたいと考えるようになってきている。具体的には語学や会計等のスキルだけでなく、企業の事業計画の立て方や利益配分の考え方等にも関心を持つ者が増えており、OJT の形でこうした内容が学べることは高く評価されているようだった。

④戸籍問題への根強い不満

これに対して、現在の問題として筆頭に挙げられたのは戸籍制度であった。特に東ガン市の戸籍のない外からの出稼ぎ者は、子供を市内の正式な小学校（極めて立派な建物である）に進学させることができず、環境の劣った私立の小学校に進ませるしかないという。このため、現実問題としては子供を実家の祖父母に預けて東ガンに働きに出ることが多く、いわゆる「留守児童」問題が深刻になっている。元からの住民を過度に優遇する一方で出稼ぎに来た者に十分な公共サービスを提供しない現在の戸籍制度は、出稼ぎに来た労働者の不満を募らせるだけでなく、これらの人たちが都市で定着して子供を育て都市に溶け込むことを困難にし、ひいては企業にとっても優秀な労働者を長期に定着させることの大きな障害になっているという評価であった。

（3）農民工の暮らす「城中村」

2011 年度 JETRO 香港委託調査によれば、都市に働きに来た農民工の約半分は住居費の安い「城中村」に暮らしているとされる。この「城中村」とはいったいどのようなものであるのだろうか。中国語で「城」とは都市のことであり、「城中村」とは「都市の中の村」というほどの意味である。もともと都市郊外にあった農村が、都市が急速に拡大する中で

都市に飲み込まれてしまった状態を指す。

中国では都市と農村は土地の所有形態が異なる。都市の土地は国有であるのに対し、農村の宅地はあくまで集団所有である。このため、「城中村」は都市にありながらそこに本来住み住宅を建てられるのは農民だけという建前になっており、資産としての流通性もないため担保物権にもならない。もともとの農民が自分の宅地目いっぱいの高層化して建設するため多くの物権では窓から光がささず、一つ一つの部屋は小さく、そこに数人が一緒に生活（合租）するのが一般的である。合租する際の賃料は平均で1部屋300元～500元程度（深セン市）と安い。

今回、深セン市の有名な「城中村」である上沙村と皇崗村を訪問したので以下に写真を掲載し参考に供したい。





(以上)